

思い出を話したすとキリがありませんが、まず思い出すのは、むすびえ設立前になります  
が、「広がれ、こども食堂の輪」の全国キャラバンでしょうか。

当時、こども食堂は全国に 300 程度。県によっては 4-5 箇所しかないという中で、それでも  
素晴らしい活動を広めたいということで、豊島 WAKUWAKU の栗林さんを代表に全国を  
回ろう！というキャラバンでした。

各県で実行委を作っていただいてイベントを行うという建て付けでしたが、当時はまだ各  
県の方たちと顔見知りでもなく、ツテをたどって、会ったことも話したこともない人たちに  
電話し、「これこれでキャラバンをやっているが、実行委員会をつくって、一緒にやってく  
れないか」と持ちかけました。いま考えると、どこの馬の骨ともわからない、一度も会った  
ことのない人間に、ホント、よく相手してくれたものだと思います。

よく覚えているのは、やっぱり、スムーズにいったところより、苦労したところ（笑）。  
キャラバンの相談をしたいと乗り込んで、会議を設定してもらったところまではよかった  
けど、誰も「引き受ける」とは言ってくれず、うーみんな難しいか〜となって終わったとこ  
ろがいくつかありました。そんな中で、後日「自分がやる」と引き受けてくれたのが、群馬  
の丸茂さんや徳島の佐伯さんでした。ありがたかった…。ちょっとパターンは違うけど、最  
初にコンタクトした人たちが必ずしもうまくいかなかったときに、引き受けてくれた長崎  
の数山さんや桜井さんにも感謝！でした。

何の得にもならないし、無償のボランティアなのに、必要と思えば自ら引き受けるというこ  
ども食堂の人たちの気概に触れたのは、その頃が最初だったかもしれません。その後、私は  
その気概に何度も何度も触れることになります…。

気概と言えば、あれもすごかった。コロナを理由に当時の安倍総理が学校の一斉休校を要請  
した 2020 年の 2 月 27 日（金）夕方、週明け火曜からもう一斉休校だとなったとき。いつ  
たん、えっどうしよう…とパニックになりましたが、当時 LINE でやりとりしていたみなさ  
んからは、その日のうちにその後の対応方針についての連絡が続々入りました。

福井・中村さん：

早速シングルマザーさんから、どうしよう！という連絡がありました。青空で、敦賀市内の  
7 店舗のお弁当屋さんにご協力いただき、「こどものつながるごはん」として、18 歳以下の  
子どもに無料でお弁当を渡していただいております。今回の件で、「無料チケット」があり  
ますので、各ご家庭に（参加者の住所は把握しておりますので）配ろうか、と思っております。  
資金は、各お弁当屋さん、募金箱を置いていただいております。まだ、私だけの頭の中で

考えおりますので、明日スタッフさんと相談して話し合おうと思います。

鹿児島・園田さん：

私の携わっている「森の玉里子ども食堂」は、さきほど運営者みんなで決めたのですが、予定の3月7日は食堂は中止をするけど、いつも提供してもらっているパンや野菜は予定通りいただき、必要な御家庭にお渡しすることになりました。

三重・対馬さん：

まだ、団体の中で相談して決定したことではなく、私の個人的な考えです。3月のこども食堂は、中止をうたっておいて当日は会場で待機、必要な家庭だけ食事を提供しようと思っていました。今回の小中高の休校のニュースをきき、それでは全く足りない、他の策を考えなければ、と思っています。うちで個別にフードバンクで支援している家庭でも休校の間は給食がなくなってしまうため、緊急に食品のお届けをする必要があると思うことと、あとは、年2回開催しているフードパントリーを、3月に緊急でやろうかと考えています。

長崎・数山さん

私たちもくもくは、とりあえず、週に3回開けて、子どもの受け入れをします、しかし、これは、クローズドで、普段から、くもく食堂に来ているシングルマザーのお子さんを中心に預かるのと、病院で働いている人などのお子さんを中心とします（病院は、要請がありましたので）。昼御飯をだして、基本無料です(人件費は、病院よりです)。

その日のうちに！ホント、すごいと思いました。こういうこども食堂が全国にたくさんあって、4月の時点で全国の6割のこども食堂が弁当・食材配布を行っている、という状態でした。町内会も各種イベントもすべて止まっていた史上初の緊急事態宣言下で！

できない理由を探せばいくらでも見つかる、やる理由を探す方がはるかに難しい、それどころかやったら非難されることもある、といった状況下で、それでも自分たちができることを何とか見つけて、ときにひねり出して、間に合わせでも何でも、できることをやっていこうという姿に、私は感動しました。それは「できる人が、できる時に、できる事から」という地域活動の精神、「ないものねだりより、あるものさがし」という地元学の精神を、自然に体現した姿だったと思います。

あのときの感動は今でも鮮明に覚えていて、思い出たびに、自分もやれることをやろう、という思いを新たにします。むすびえの「中期計画」にも次のように書きました。

「「しょうがないよね」とあきらめの鐘を鳴らして当然の状況だったにもかかわらず、こども食堂の人たちはもがき、あがいた。(中略) 私たちはこども食堂の人たちに何とか追いつ

こうともがいた。(中略)しかし率直に言って、[当時のむすびえは]事業もメンバーもガタガタだった。特に2020年度は、運営は混乱し、人は辞め、効果のあがらない事業もたくさんあった。前代未聞の事態の中で、何をやっていいのかわからない、それでも何かはやってみる、効果があがるかはわからない、それでもやらないという選択肢だけは取らない、というもがきとあがきだった。「やらないという選択肢だけは取らない」——そこを手放したら、もがきあがき続けることも食堂の人たちに顔向けできないと思った」

こうして感激させてもらった経験は、挙げ始めれば本当にキリがありません。コロナ禍でも毎年1,000箇所以上、誰かが新たに始めるということにも、エピソードワークショップで聞いた数々のエピソードにも、その他その他…にも、こども食堂のみなさんには、ずっと驚かされっぱなし、感激しっぱなしでした。

気持ちのいい人たち。私がこども食堂を勝手に応援させてもらってきた理由は、結局、こういう気持ちのいいみなさんと一緒にいられることがうれしく、楽しかったからだと思います。みなさんと一緒に過ごす時間が、私にとっての居場所でした。

だから「推し活」みたいなもんだと思っています。勝手に「全国センター」を名乗り、勝手にこども食堂を応援させてもらってきました。私は運営者という意味での当事者ではありませんが、それでもこの社会の当事者として、「よい、すばらしい」と思うものを推させてもらう。私に「むすびえ」を作ってほしいと頼んだ人は誰もいませんが、それはこども食堂の人たちが、特に誰から頼まれたわけでもなくともこども食堂を立ち上げているようなもの。栗林さんはよく「おせっかい」という言葉を使いますが、「おせっかい」「余計なお世話」「勝手連」「推し活」……自分がやりたい、やるべきと思うことを、自分の責任で行う。それは結局、自分がその場にいたいから、自分がそれをしたいから、だったな、と。

「社会活動家」という物騒な(笑)肩書を名乗って20年になります。「社会を良くしようと自ら取り組む人のことで、コワイ人のことではありません」と言い続けてきましたが、そうした人たちと出会う機会は、もちろんありましたが、決して全国津々浦々という感じではありませんでした。

それがこども食堂に関わっていると、北海道から沖縄まで、文字通り全国津々浦々、都市部から地方、そして離島まで、本当にたくさんの、ふつうの、役職や肩書きとは無縁なところで、自ら取り組もうとする人たちと出会える。私にはそのことがうれしく、「世の中捨てたもんじゃない」と心底思うことができました。みなさんと話し、みなさんから聞き、議論もし、一緒に悩み、たまに喧嘩もする時間と空間が、私にとっての居場所だったのだと思います(役所にどうアプローチするか、学校にどう働きかけるか、こどもや参加者への対応はそ

れでいいのか等々、しばしば移動中の車内で、飲み会で、「これからどうするか」と作戦会議のようなものをやるのが、楽しく、好きな時間でした。

――

（ここらへんから、やや堅い話になります…）

私も、私なりに結構長く、「民主主義」のことを考えてきました。もう 10 年以上前になりますが、40 歳そこそこのときに、民主主義に関する本を書きました（『ヒーローを待っていても世界は変わらない』）。私たちはこの国の主権者で、それは憲法にも明記されているのに、どうして人は自分が主権者じゃないような振る舞いをするのか、という疑問を出発点とした本でした。

世の中にはいろんな意見がある。それでも何かを決めようとすれば、そのために必要な調整を面倒でもやらないといけない。でも人によっては、それを自分でできる気はしないし、面倒だし、重たい責任は引き受けたくないから、自分では「いろいろな意見がありますよね。難しいですよ」と言うに留め、面倒な調整を誰かに預ける。でも自分の意見が正しいとは思っているのに、上手に調整して自分にとって都合のよい結論を出してくれるものと期待する。「決めてくれ、ただし私の思う通りに」というマインド。でも同じことを、反対の意見を持つ人も思っている。だから当然、そんなに都合のいい結論は出ない。自分の思い通りにならなかったのが幻滅する。でも悪いのは自分の期待を裏切った相手だと思うので、「決めてくれ、ただし私の思い通りに」というマインドは変わらない。そうして相変わらず「難しいですよ」と自分では引き受けないまま、次の誰か（ヒーロー）を探す。それぞれがヒーローに期待し、しかし裏切られたと言って幻滅し、また次のヒーローを探す…。その繰り返しでは世の中はよくならないだろう、といった話でした。

運営者の人たちは、スタッフ・ボランティア・参加者それぞれに十人十色の意見がある中で、いろんなことを引き受けながら、何十回、何年と運営してこられた。面倒なことやしんどいこと、うんざりすることも山のようにあったと思いますが、それでもしゃべらないこともがしゃべった、笑わなかった人が笑った、見向きもしなかった人が振り向いた…といった経験をエネルギーに、「難しいですよ」で終わらせずに、面倒なことを引き受け、和を大事にしながらも、物事を前に進めている。それは、おおげさに聞こえるかもしれませんが、私にとっては民主主義を前に進める態度・取組みです。

運営者だけではなく、多くのこども食堂のようなオープンな場にはいろんな人が参加するから、異年齢で遊んだり、違う学校の子と知り合ったり、親と違うタイプの大人と出会ったり、ママ友ができたり、知らなかった地域の情報に触れたりする。交流の居場所のキ

ーワードは「違い」だ、とよく言ってきましたが、参加する人たちは、交流の中で、いろんな違いに触れ、いろんな違いになじみ、いろんな違いに対処できるようになっていくのだと思います。

最近よく「体験格差」という言葉を聞くようになりましたが、私は、海外旅行とか英語学習とかプログラミングとかといった、特別で、与えられた体験があるかないかということよりも、自然の森の中で木切れを見つけて遊ぶように、人々の森の中でいろんな人にもまれて、自分で体感し、身につけていく体験のほうが、より重要で本質的な体験なのではないか、と感じます。

「分断」や「民主主義の危機」ということも、よく聞くようになりました。アメリカの話のようにも言われますが、程度の差こそあれ、日本も他人事ではない、と思います。そういう中で「ごはん食べにいて、気づいてみたらいろんな違いに触れることになった」というこども食堂が果たしている役割は、とても大切なものなんじゃないか、と思ってきました。しかもそういう機会を、日本中で、年間延べ 2,000 万という人たちに提供している。こういう場所が、誰にとっても身近なところにある、行きたいときには行ける、という状態が広がれば、日本の民主主義はなんとか持ち堪えられるんじゃないか、という希望を感じてきました。

あんまり聞かなくなりましたが、「地域活動は民主主義の学校」という言葉があります。地域には真の多様性があるからです。地域に比べれば、年齢や学力・能力・資力で仕切られた学校や企業の多様性などかわいいものです。地域に開かれ、いろんな人を受け入れているこども食堂は、言ってみれば地域の最前線で、それはつまり、民主主義の最前線でもある、と私は思ってきました。

まったくの偶然ですが、私が先の本を書いたのは 2012 年。こども食堂が誕生した、とされる年です。私は勝手に、みなさんを、日本の民主主義を支えようとする同志だとも、思わせてもらってきました。(かなり堅苦しく、暑苦しい(笑) 話でもあるので、あんまり口に出してはきませんでした…)

――

……と、まだまだ書いてしまいそうですが、いい加減長くなっているんで、このあたりにします。

むすびえの理事長は降りますが、変わるのはその肩書きだけ、というのが率直な気持ちで

す。こども食堂や地域の居場所が、今の社会、これからの社会に大切な存在だという考えは変わらないし、気持ちのいいみなさんとまたたくさん話したい、という気持ちも変わりません。「推し活」は、これからも勝手に、続けさせてもらいます。なので、これからも引き続き相手してやってもらえると嬉しいです。(連絡先も変わりません)

ただ、私の個人的な気質として、あまり長い間、同じポジションに留まるのは性に合わないし、団体としても新陳代謝があったほうがよいのではないかと思うので、理事長は交代します。むすびえには、業務請負の「公共政策アドバイザー」という形で関わっていきます。

その他の肩書き（東京大学の特任教授など）に変更はなく、一番大切にしている「社会活動家」という肩書は一生続けるつもりです。もっと、コワくない、ふつうの、楽しいことをする人たちが名乗る肩書だと思ってもらえるようになるといいんですが…。

というわけで、ありがとうございました。そして引き続き、よろしくお願いします。少し時間が生まれる分、各地にもトンボ返りではない形で立ち寄らせてもらう機会を増やせたらいいな、と思っています。

2025 年 6 月 2 日 湯浅誠